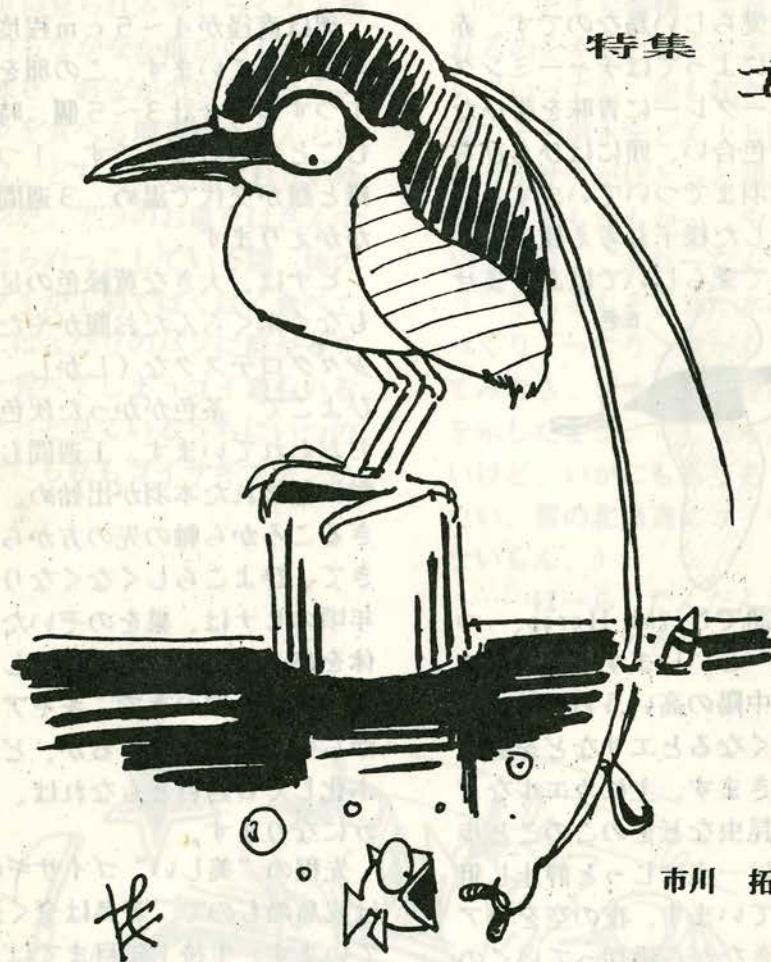


すずがわ通信 45

行徳野鳥観察舎友の会会報 1987年8月1日発行

特集

ゴイサギ



市川 拓 画



ゴイサギ

鈴木 希伊

…突然ながら、何故かゴイサギ君は嫌われ者です。意地悪そうな赤い眼、にゅっと突き出た黒いくちばし、のそーっと立ちつくすふてぶてしいあの態度……しかし、どうしてどうして、よく見ればなんとも美しく愛らしい鳥なのです。赤い眼だって見方によつてはチャーミングなもの、シルバーグレーに青味を帯びた黒という上品な色合い、頭にはひらひらとかわいい飾り羽までついていますし、あののそのそとした様子も考え方によつてはユーモラスで愛らしいではありますか……。



ゴイサギは英語でNight Heron、つまり“夜のサギ”といいます。その名の通り、彼らは日中陽の高いうちは休んでおり、夕方薄暗くなるとエサなどをあさりに水辺に出てきます。主にカエルなどの両生類、魚、昆虫などをこのこと歩きながら、または一点にじっと静止し狙いを定めて獲っています。夜の空をコアッ、コアッと鳴きながら横切っていくのを御覧になった方も多いのではないかと思います。

休眠は水辺の樹上でとり、巣もそこにつくります。時にはヨシ原などに作ることもあるようです。コロニーを作る場合も多く、同じゴイサギの他、各種のサギ類や水鳥達と一緒に集団でわいわいと営巣したりもしています。巣材には色々なものを用いますが普通は小枝で、それを

組み合わせて中央が浅くくぼんだ皿型の巣を作ります。巣は雌が作り始め、後に雄が雌のために巣材を運んできては渡すという形でこれを手伝います。もちろん雌自身でも巣材探しに出かけます。

卵は直径が4~5cm程度で、薄い青緑色をしています。この卵を1日おきに1つずつ、合計3~5個、時には6個うむこともあるようです。1つ目の卵から雄と雌が交代で温め、3週間ほどでヒナがかえります。

ヒナは、大きな黄緑色の足と、みつともなくふくらんだお腹がやたらに目立つ少々グロテスクな（しかし、愛らしい！）ひよこで、茶色がかった灰色のうぶ毛におおわれています。1週間もすると、羽軸に包まれた本羽が出始め、10日をすぎるころから軸の先の方から羽が開いてきて、ひよこらしくなります。この年頃のヒナは、巣をのぞいたりすると、体をぴったり伏せてじっとしているか、ものすごい顔つきで、ギャアッと叫びながら突きかかってくるか、どちらかです。ふ化して6週目ともなれば、飛び回るようになります。

先程の“美しい”ゴイサギの姿は、実は成鳥のもので、若鳥は全く違う姿をしています。生後1年目までは、背面は全体にこげ茶色でうすいクリーム色の斑点が一面についています。目は黄色（1才になるころはオレンジ色）で、頭の先から脚の先までびしっと決まっている成鳥に比べると、少々間の抜けた感じもします。この頃の若鳥をホシゴイ（星五位）とも呼びます。2年目になると斑点は消えてきて、体の色も灰色になります。満2才になるころには、全体にいくらかく

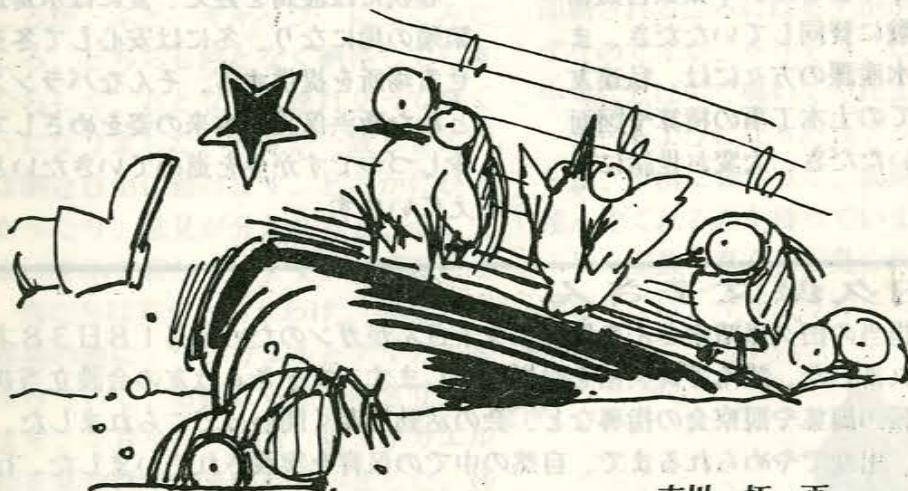
すんではいるものの、ほとんど成鳥と同じ色になりますが、飾り羽はまだありません。

観察舎前の水路にもゴイサギはたくさん居ます。堤防の上に点々と止まって休んでいたり、エサ場に置かれた魚のあらをお目当てにヨシの間をごそごそ歩いていたり。身近に見られる分じっくりと観察してみるのもなかなか面白いものです。年令、力の強さ、おなかの空き具合などにより、アラを食べる順番がきちんと決まっていたり、どちらが先かでお互いゆずらない2羽が、アラのお皿をはさんでいつまでもにらめっこしている間、体の小さなホシゴイが1羽でぱくぱく食べていたり、中にはとなりのパンに群がっているスズメを食べてしまうゴイ君もいるとか……。じーっと見ているうちにいつの間にやらあなたも私もゴイサギファンになれ、ます、よ。

(ちょっと楽しいお話)

これは、友人から聞いた話です。雪深い北海道の野山を歩いていた時のこと、まっ白に降り積もった雪の原に倒木が一本、その上にたくさんのゴイサギが一列に止まって睡っていたそうで、それもよく見れば、こっくりこっくり舟を漕いでいて、とても愉快。雪が足音を消してくれるのを幸いと、その木のところまで歩いていっても、誰も起きない。そこで片足でその倒木をどん！と蹴ったら、数羽のゴイサギがぱっと頭から雪の中に落ちて足をもがもが…。やつの思いではい上がり、“あれーなんで落ちたんだろう”ともそもそも木の上に登つてこっくりこっくり。彼がもう一度木を蹴ってみたら、ゴイサギ君達は再び同じ反応を示したとか。（もちろん、実話じゃないけど、いかにもありそうでしょ。だいたい、雪の北海道にゴイサギがいるわけないもん。）

……ほーら、だんだんゴイサギが好きになってきたじゃありませんか、ね。



市川 拓 画

観察してみよう！

幼鳥と成鳥

どこが違うか？

工サ場では

どっちが強いたる？



はおと

7月2日、千葉県に緑地保全地区内行為許可を申請し、水鳥誘致のための湿地造成工事許可関係の書類手続がやっとすべて終了しました。許可があり次第着手し、8月半ばには工事を完了したいと考えています。

一任意団体が保全地区内において、たとえ水鳥誘致が目的であっても、土地の形質変更を行うというのは、非常に異例なことであったので、書類手続に思いの外、時間がかかりました。千葉県自然保護課には、実験に賛同していただき、また、市川市農水産課の方々には、私達友の会では初めての土木工事の積算や図面作成をご指導いただき、大変お世話になりました。

東 良一

6月下旬、保護区から2晩だけヒクイナの声が聞こえました。工事が完了していれば、この夏繁殖したかもしれません。今年はまだヨシゴイの姿も見られず、繁殖する鳥は減る一方のようです。

また、妙典のハス田では、予想以上の急ピッチで埋め立てが進んでいます。なるべく早く工事を完了して、いつものように新浜に渡ってくる水鳥達を迎える場所を作りたいものです。

春秋には渡鳥を迎え、夏には水鳥達の繁殖の場になり、冬には安心して冬を越せる場所を提供する、そんなバランスのとれた新浜保護区本来の姿をめざして、少しづつですが歩を進めたいと考えています。

追悼 田久保文子さん

新浜観察会担当の田久保晴孝さんの奥様、文子さんがガンのため6月18日38才の若さでご逝去されました。謹んで御冥福をお祈り致します。文子さんは友の会設立当初からの会員で、会報の編集や観察会の指導など、会の活動と深く関わってこられました。保母を天職とされ、出産でやめられるまで、自然の中での保育を実践されていました。行徳で生まれ育ち、妙典の蓮田などにかろうじて残っていた行徳の自然を心から愛されていました。文子さんが1981年から82年にかけて、すずがも通信および行徳のミニコミ誌月刊ばすけっとに書かれた文章を別刷にまとめました。文子さんをしのぶとともに、行徳の昔ながらの自然とはどんなものであったのかをもう一度みつめ直してみたいと思います。

鳥の国から

このところ、わが家の猫どもはもっぱら“キャツ”になっています。猫どもだからいつでもキャツ？いえ、2ひきの猫を1本のひもの両端につないでおくことをわが家ではキャツと呼んでいるのです。この時期、あたりにはひな鳥がいっぱい。日中に猫を放しておこうものなら次々にスズメの子が犠牲になってしまいます。まっ黒なモトメスのスヌムも茶白のオスのボンドも年期の入った猫で、ある晩など、通用口のトイレの窓からストンととびおりてきたボンドが、いつものように鳴いてあいさつをしないので振り向くと、猫とゴイサギの顔が並んでいてびっくり。何で家の中にゴイサギがいるのかとふしぎに思ってから、ボンドが首をくわえて運んできたのに気がつきました。ほとんど無傷だったので、2日後に放してやれたのは不幸中の幸い。

そんなわけで、繁殖期には猫をつなぐことにしていますが、つながれた猫はいとも哀れな声で鳴きわめくのです。ところが、ふと“キャツ”にしてみたところ、どちらも何となく納得してしまったらしく、おとなしく連れ立って歩くようになりました。意見が一致しさえすれば割合自由に動けます。どこかにひつかかったり、意見が分かれると、そこで止まってふて寝しています。いずれにせよ、鳥たちは安全というわけ。

餌場の池に、ウシガエルとアマガエルがすみついで、毎晩しっかり鳴き立てています。7月9日の夕方、主人がカエルの卵を見つけて大喜びしていました。径2ミリくらいの小さな黒い卵が1000粒以上も水に浮いています。ウシガエルの卵でした。いっぱいおたまになってくれるといいのですが。

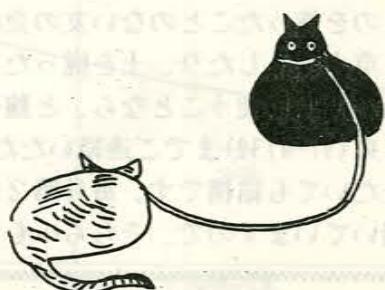
蓮尾 純子

せせらぎ1号のフロートの上に、こともあろうにパンが巣を作りました。水位が低く、しぶきがほとんど上がらない時に巣を作り、卵を3個うんだところで雨。プロペラがね上げる滝のような水しぶきにうたれて、やむなく放棄したようです。巣があることがわかつていたら、プロペラの片方を止めてやったのに、残念。

猫実排水機場付近のしゅんせつ工事でこのところずっと丸浜川の水位が低く、泥底が露出しているためか、イソシギやコチドリ、ハクセキレイがいつも見られます。イソシギのヒナも初めて見つかりました。

ムクドリやスズメのヒナがやたらに多い割に、カルガモやキジ、バンなどのヒナはさっぱり。セイタカシギも、今年は1羽もヒナが巣立たないまま、鴨場から姿を消してしまいました。わずかな救いは、サギがいくらか去年より多いことだけ。でも、セブンイレブンから観察舎の駐車場に向かう途中のとてもよく見えるところにパンの巣があって、今のところ順調です。この文が印刷されるころにはヒナがかえっているはずなのですが。そうそう、ヒクイナが6月中旬にしばらく鳴いてくれましたっけ。

飛べるようになったコアジサシのヒナたちが、干潟に集まって、親鳥が餌の小魚を運んでくれるのを待っています。来年もこうした家族の暮らしが見られますように。望むべくは、今年よりいくらかでも多く。

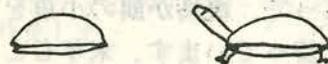


水車ニュース

ようやくポンプ設置の許可がおりました。「近郊緑地内土地使用許可」「海岸占用許可（水車、ポンプ、電柱などを設置することの許可）」「淡水池造成積算書」「淡水池造成設計書」その他の資料いっさいをつけて、やっとのことで、7月2日に「近郊緑地内行為許可申請書」を提出することができました。あとは許可を待つだけです。2月12日付で土地使用許可の申請をしてから延々5か月、ああしんど、といいたいのは山々ですが

“近郊緑地特別保全地区”というたいへんきびしい規制の網をかけられた保護区で、ともかく水質改善と水鳥誘致のために9000m²の湿地の造成実験をすることが、1任意団体にすぎない友の会に認められたというのは、行政の大英断というべきなのでしょう。でも、しんど。

ポンプ一式と、通水用の塩ビパイプが届いています。湿地造成予定地はススキやセイタカアワダチソウがおいしげり、簡単には歩くこともできませんが、ともかく秋までには工事が終わるでしょう。シギの渡りに間に合うとよいのですが。



ヘルプ！

仕事人募集中

8月から、いよいよ「よみがえれ新浜」湿地造成工事が始まります。日頃、はしや鉛筆より重いものを持ったことのない友の会の面々が草刈り機やスコップをかつき、細腕をふるって草刈りをしたり、土を掘ったり……。お手伝い下さる方を募集しています。力仕事なら、頭を使うことなら、と腕や頭に自信のある方もない方もよろしくお願いします。東(97-0732)までご連絡いただいても、また観察舎附近での作業中に声をかけていただいても結構です。毎月第2日曜日の午後4時頃から、観察舎図書室で運営会議を開いていますので、そちらへもどうぞ。

水位が低い状態に保たれているおかげで、水鳥の繁殖状況はまあまあ順調。

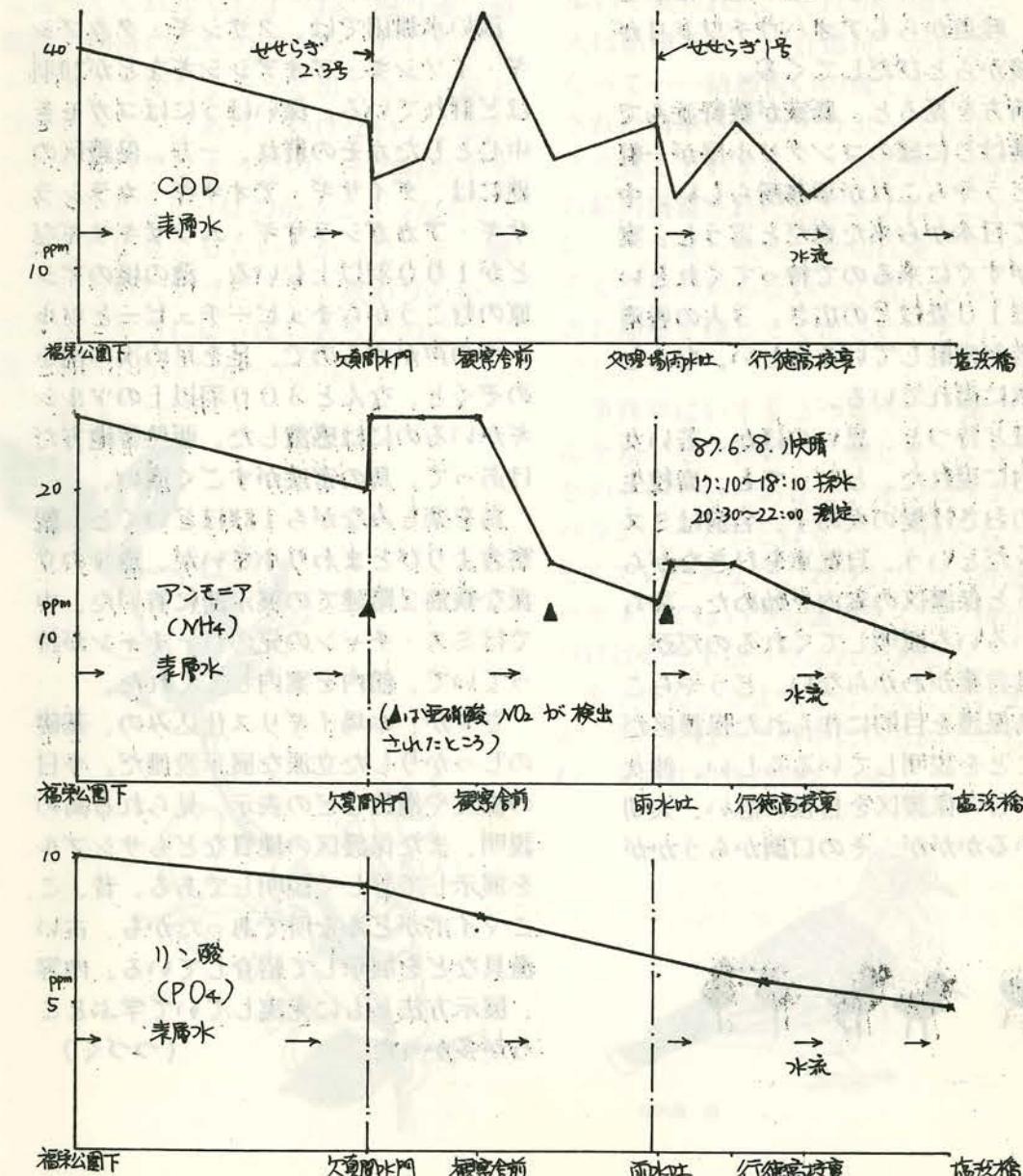
“欠真間三角”的バンは、巣材を15cm以上も積み上げて増水とたたかい、どうやらヒナをかえしたようです。7月15日、ひさびさに観察舎からカルガモ一家が見られました。それもヒナ10羽と8羽の2組。朝、道路から丸浜川にとびおりるところが見られたとのことで、道路脇の草地でヒナをかえしたのかも知れません。2家族とも、餌場から水車のあるあたりを行ったり来たりして、しきりに餌を探していますが、ゴイサギやセグロカモメがものほしげに見守っているのが心配です。このほか、オオヨシキリ、コチドリ、イソシギ、ハクセキレイの繁殖は確実でしょう。

丸浜川は、猫実排水機場前のしゅんせつ、砂入れ工事のために、5月28日以来ずっと水位が低く保たれるようにひんぱんに排水されています。湊排水機場でポンプ排水が行なわれた時には、水の動きがほとんどなくなり、藻類の大発生で水が黄褐色、緑、黄緑、茶色などに変わります。湊排水機場の水位が高い時は、水が勢いよく流下して行き、水の色はたいてい灰色です。猫実排水機場で排水がおこなわれない時は、1、2日で水位が80cm近くも上昇し、水はまっ黒で臭気もきつくなります。

よく晴れた日、水位が低く、流入水量が比較的少なく（1時間に50～300トン程度）、よごれた水が丸浜川をゆっくり流下する時には、どぶ川そのものが自浄能力を発揮するのではないかと考えて、6月8日に水質調査をやってみました。結果が下のグラフです。ちょっときれいすぎる値なので、もっと回数を重ねて確かめる必要がありますが、この日の結果では、上流の福栄公園下にくらべ、1200m下流の塩浜橋付近では、アン

モニアが3分の1、りん酸が半分になっていました。いつもこうした状態が維持できるといいのですが。

せせらぎ2、3号は、臭気のため7月10日から夜間（午後7時から午前7時）まで止めています。ご近所の方にはにおいや音で迷惑をおかけし、申し訳ないので、どうも色々な点で水車の効果がつかめそうなので、見守っていただければありがたいと思います。



マイボ訪問記 その2

舗装道路の切れたところで車を降り、徒歩で保護区へ向かう。幅6M程の農道の両側の水耕田ではシギやオオバンがえさをとっている。ところどころにある灌木からキマユムシクイやらシロガシラやらカノコバトやらが、群れをなして飛び出してくれる。数歩行ってはプロミナ(望遠鏡)をかまえ、また数歩行っては……といった具合でなかなか道がはからだらない。畦道からもアオハウチワドリが後から後からとびだしてくる。

ふと前方を見ると、農家が数軒並んでいる一番はじめに緑のコンクリ小屋が一軒ある。どうやらこれが事務所らしい。中に入つて日本から来た東だと言うと、案内の者がすぐに来るので待ってくれという。中は10畳ほどの広さ、3人の香港人の若者が常駐しているらしい。なんとなく活気に溢れている。

5分ほど待つと、思いのほか、若い女性が案内に現れた。といつても、高校生くらいのおさげ髪の女の子。名前はミス・チャンだという。自転車をひきながらさっそうと保護区の案内を始めた。誇らしげにいろいろ説明してくれるのだが、こちらは言葉がわからない。どうやらここが水鳥保護を目的に作られた保護区だということを説明しているらしい。彼女がいかにこの保護区を自慢に思い、大切にしているかが、その口調からうかがわれた。



東 良一

幅3Mほどの舗装観察路の右手が保護区、左手は普通の民有地だという。ところが、間には柵もなく、ただこの観察路自体が保護区の境となっているだけだ。途中には、1台大きなポンプがあり、このポンプで民有地の水耕田から保護区内の池に水を汲み上げたり、また、民有地の方へ排水したりして池の水位調整をしているとのことだった。

浅い水耕田では、クサシギ・タカブシギ・イソシギ・アオアシシギなどが20羽ほど群れている。深いほうにはコガモを中心としたカモの群れ。一方、保護区の池には、ダイサギ・アオサギ・カラシラサギ・アカガシラサギ・ムラサキサギなどが100羽以上もいる。池の境のアシ原のむこうからチュピーチュピーとツルシギの声がするので、足を早め次の池をのぞくと、なんと300羽以上のツルシギがいるのには感激した。亜熱帯地方だけあって、鳥の密度がすごく濃い。

鳥を楽しみながら1KMほどいくと、観察舎よりひとまわり小さいが、造りの立派な鉄筋2階建ての展示館に着いた。中ではミス・チャンの兄のDr.チャンが待っていて、館内を案内してくれた。

さすが、本場イギリス仕込みの、基礎のしっかりした立派な展示設備だ。今日の温度や潮位などの表示、見られる鳥の説明、また保護区の地質などもサンプルを展示して詳しく説明してある。昔、ここのマイボがどんな所であったかも、古い漁具などを展示して紹介している。内容、展示方法ともに充実していて学ぶところが多かった。

(つづく)

追悼 田久保文子さん

文子さん、あなたにお別れに行った夜東西線の西船橋から京成線に乗りかえる途中、そう、図書館の裏山のところでアオバズクが鳴いていたの。あなたはきっと「あらあ、私も聞いたかったわあ。」と言ってくれたでしょうね。帰り道、道路脇の側溝のふたの穴から、ちいちゃなドブネズミがちょろっと出てきて、私と目があって、「あ、いけない」とまた穴にもぐってしまった。その時のネズミのかかととしっぽのかっこうったら。

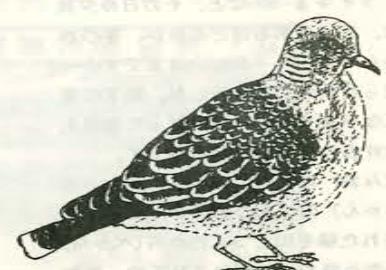
あなたに見てもらいたかったこと、聞いてもらいたかったこと、教わりたかったこと、本当にいっぱいあったのに。一緒に笑いころげたかったのに。



あなたは行徳暮らしの大先輩。「歯医者さんは?」「美容院は?」いちいち教えていただいたものでした。観察舎への道すじにヤマザクラを植えている時、あなたと晴孝さんが初めて二人連れ立って歩いて来られた、それから間もなくお二人は結婚され、“行徳村”がにぎやかになって……結婚祝いの席であなたが紹介された晴孝さんのプロポーズ方法、はっきり覚えています。「何も言わないで、お給料袋渡されたんですよね。これなあに、って言つたら、手切れ金ですって。そんなものいらないって言つたら、じゃあお部屋を探してください、ということでした。」

事務室にいすを2つ並べて、陽子ちゃんを寝かせておいて、楽しそうに望遠鏡をのぞいていたあなた。オシロイバナのバラシュートをとばせて、子供たちとあそんでいたあなた。おりおりの“行徳パーティ”ではいつも裏方さんで、後かたづけばかり手伝ってくれたあなた。

文子さん、さようならなんて言いません。あなたはそこら中にいるのですものね。夏の花や鳥たちと一緒に。



松木屋 (Matsumoto-ya)

変わりゆく行徳 1

朝露の畦道

ランドセルをショット、みち草をしていたころ、朝の畦道は、水玉をのせてころがしている蓮の葉、稻の葉を住居としているフクログモ、足音を聞いて“ぼちゃん”と身をかくすカエル、クイのそばでそっと外をうかがっているザリガニ、そんな自然の匂や音で、すっぽりとかくれていました。だからいつも、細い畦道を、何かを期待しながら歩いていました。

運動ぐつも、ひざこそうも、学校に着くころには、朝露でびっしょりぬれっていました。

こんな思い出のある人は、“いったいどこで育ったのかしら”と思われるかもしれませんね！これは昭和30年代の行徳のことです。



▲昭和37年頃の胡守さん撮影

変わりゆく行徳 2

せき(堰)ざらい

今はなつかしい村の行事になってしましましたが、大寒が明けるとまもなく、せきざらいが行われました。

せきざらいとは、村の男衆が集まって、土砂で浅くなった水路（みお）の底を、掘る仕事です。水の流れをせき止めて掘るのですが、体中どろ水につかっての仕事で、かなり重労働のはずなのですが、皆さん、大声ではしゃぎまわっていました。

それは、掘るそばから、フナ、コイ、ドジョウ、ウナギ、ライギョ……など、その日の夕食のおかずでは、ありあまるほどの魚が、手づかみで取れるからです。——楽しいはずです——そして、あまたの魚のつるし干しが、軒下に見られるようになります。甘露煮になって田植えや稲刈りのお弁当のおかずになるのです。

この水路（みお）は、秋になると、「とうちやん・かあちゃん」の二人の船頭さんによって、田んぼで干された稻を山とつんだ小舟（べか舟）が、器用に舟先と後をさおでおされてやってきます。それはとってもどかな光景でした。（水路のわきのマコモや、底の水草、そんなものも大切にしたいですね）65年ごろまでの光景です。

変わりゆく行徳 3

近代化の波

自然色豊かな生活をしていた行徳地区に、近代化の波がおしよせてきたのは、東西線が開通した頃からでしょう（S.43年）

またたく間に、マコモが生え、タニシ、ミズスマシ、タナゴ等の遊ぶ小川は、生き物の住めないコンクリートの水路に変り、ウマヤ道のきれたカマヤ土手あたりから海岸までと続く一面のアシ原は、影も形もなく埋め立てられ、今ではマンションや建て売り住宅の建ちならぶところ化してしまっています。

鳥の生活を知らなかつたあの頃の私には、アシ原にどんな鳥が羽を休め、また巣を造っていたかはわかりませんが、きっと四季を通して數十種の鳥が憩の場としてたちよっていたことでしょう。

小動物にとって、天災よりはるかに恐ろしいものは、ブルドーザーと、それをあやつる人間達ではないでしょうか？！

変わりゆく行徳 4

妙典のオオバン

野鳥に対する知識のうすい私が、行徳新聞で野鳥観察会の観察会に参加したのがS51年の12月でした。指導してくださる蓮尾さんの後についてスズガモ・ヒヨドリ・キジバト……などを観察し、御糞場のねぐらに帰るムクドリの大群に出会えて胸をはずませて家路につき、鳥類図鑑をひろげました。その日から鳥のとりこになってしまったようです。

家が妙典地区に近いことから、ひまがあると出かけて行き、野鳥をさがし歩きました。体が黒くはなすじの白い鳥がいる、いる。1羽2羽…6羽もいる。一人ではじめてみつけた鳥？オオバンでした。

宅地化は駅周辺よりどんどん進んでいきました。しかし5・6年前までは、ここだけ自然が豊富に残していました。中央付近までくるとまるで大自然の中に立っているような錯覚にいつもおちいることができました。

【妙典】現在、市街化調整区域。ハス田や水田がある。埋め立てによって湿地帯は半分になってしまった。

変わりゆく行徳 5



小さくなつた自然

幾年前から続いた、あの豊かな自然の地“行徳”を思えば、またたく間に、こわされてしまつた現在の行徳の自然……。

それでも、わずかに残された妙典地区には、キヨウジョシギやツルシギの休む畦道、シラサギやカラスのとまる古木、そしてカルガモやバンの遊ぶハス田があります。水路では、ザリガニ、クチボソなどを釣り、歓声をあげている子供達の姿がみられ、ヨモギやタンポポ、セリも葉を広げ、チョウチョやバッタもあちこちでみられます。

こんなに小さくなつた自然の中にも、たくさん生き物が生活しています。それなのに生きものを皆埋めつくしてしまうあのブルトーザーが、またそこにきています。

もうこの中央付近に立っても、家が見え、鉄塔が見え、地下鉄の引き込み線が見えてしまいました。 S54年頃

変わりゆく行徳 6

自然破壊はやめて下さい

「もうこれ以上の自然破壊はやめて下さい」と江戸川放水路の土手から行徳に向って叫びたい。そんな思いでいっぱいのここ2~3年です。しかし、たとえ叫んでみても、目の前で埋め立てられていく、ハス田や沼への土砂の運搬をくいとめることはできない……。

蓮をほり、一本一本ていねいに洗う。クワをつかつて畠仕事をする……そんな農夫の姿をみることができる日は、そう長くはないでしょう？ここ（妙典地区）も市街化調整区域からはずされてしまえば、ここもマンションだらけの宅地になつてしまつてしまうでしょう。

この妙典地区にしか残されていない、ひとにぎりのかうての行徳の自然を匂わせてくれる場所を、なんとかこのまま残す方法はないでしょうか？

だれかが言っていました。「水元公園のようにして、ぜひ残したい……」と。市川市の大町の谷津田が大町自然公園として残された（保全された）。私もこの地区が、農業を生かした水辺を中心とした谷園になることを心から願っています。（おわり）

自然の国から

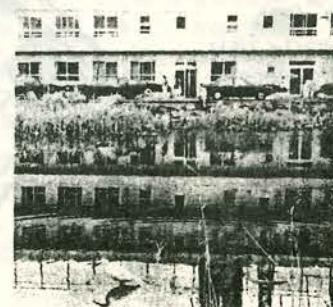
行徳つ子 集まれ！？

行徳駅より東へ5~7分以内のところに大・中・小の水たまりが4つほどあります（もとは田んぼ、または蓮田？）。

ここは四季を通じての魅力のあるところです。行徳つ子達もそのことをちゃんと知っていて、水のぬるむころより、枯葉の散りはじめるころまではザリガニ、クチボソついでにぎわいます。もちろん他の小動物も草も花もまわりに集まっています。私もそこの水たまりが大好きで毎日の散歩コースになっています。寒い冬の日にはだれもいらない水たまりをそと眺めます。うすい氷のはつた寒ざむとした水たまりです。

「私が見るから寒ざむとして見えるけど、子供達が見たらどうだろう？」「どの子もきっと喜ぶに違いない」「足の先でちょっと氷をたたき、われるかどうかためしたり、石を投げて滑らせたり、われた氷を手にして太陽をすかして見たり」「そうよ、楽しみはいっぱいあるに違いない……」

そんなことを自問自答しているうちに行徳つ子達、寒さなんかにまけないで、この水たまりに集まれと言いたくなりまし。でもそれはできません。残念なことに私の横には“あぶない、立ち入り禁止”地主、市役所の立て札がたつているのです。なんということでしょう、アスファルトの道を歩き、コンクリートの住宅にすむ新行徳つ子にこんなちっぽけな自然も与えてくれないとは！…………。



自然の国から

草摘みはもうすぐ

今朝の日ざしのまぶしさにつられて草摘みの時期にはまだ間があるようでしたが、江戸川放水路の土手下までかけました。思っていたとおりで、タンボボの葉は土にはつたまま、ギシギシの新芽もほんのちよびりのびているだけ、ヨモギも摘むと同時に土が手につくほど、ツクシは気の早い一本だけが顔をのぞかせているだけです。そんな中にオオイヌノフグリだけが水色の可愛い花びらをつけて咲いていました。後ひと月もしたらどの草もそろうのはまちがいなしでしょう。春の日ざしをからだ中にあびて、のどかに草を摘む楽しさや、摘み草を籠いっぱい手にして草だんごや、天ぷらと春の香りを食べる楽しさなど楽しみの草摘みはもうすぐです。

かつての行徳は、どこを歩いても草摘みができるほど自然のあふれたところでしたが、今はここだけになってしまいました。

行徳の子供達に自然とふれあい、味わう楽しみを知つてもらいたい、でも皆で草摘みをしたら一日で土手がからっぽになつてしまいそうです。



▲オオイヌノフグリ

鳥の鳴き声①

鳥の鳴き声には地鳴きとさえりがある。さえりは繁殖期の少し前から繁殖期にだけ聞かれるもの。地鳴きはそれ以外。

うぐいす〈鶯〉

スズメ目ヒタキ科
さえり…ホーホケキョ(谷わたり)
地鳴き…チャッチャッ



野鳥との出会い

さわやかな季節になりました。通勤・通学・買い物の途中いつでもよいのです。歩く外に出たら、あたりを見回し耳をかたむけてみると、ほら、野鳥の姿が見え、可愛い声も聞こえてきます。スズメのチュンチュンという声はだれでも知っています。でも良く聞いてみるとスズメ以外にも違う声が聞こえます。キーコロロ、キーコロロ、これはカワラヒワのさえりです。声のする方に目をやると茶色がかった緑色の体で、つばさに大きな黄色の帯もあります。口ばしもスズメと違う、はだ色をして尾の形は魚のような形をしています。大きさはスズメくらいです。

私はこの鳥と初めて出会った日のことを今でもはっきり覚えています。通勤の途中でした。電線の上で7羽が朝日を浴びて気持よさそうにさえりつていました。そして帰宅後、野鳥図鑑をひろげてカワラヒワとわかった時の感激を。その日から朝の通勤がとても楽しくなったことを。

この楽しみは、どんなにも分けられる楽しみです。皆さんも、ちょっとだけ自然界に目・耳をかたむけてみてはいかがですか!?

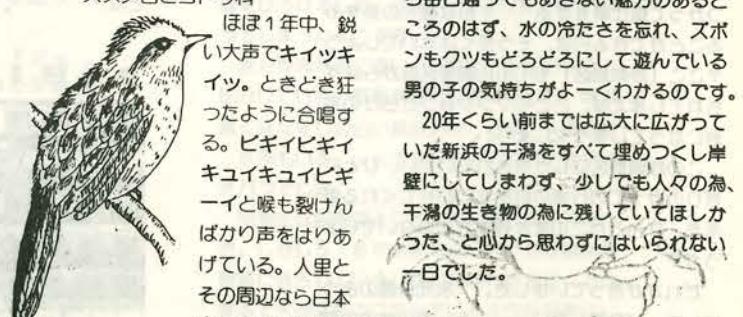
他にもヒヨドリ・キジバト・オナガ・ムクドリなど身近なところでたくさん野鳥と出会うことができます。

鳥の鳴き声②

ひよどり〈鶴〉

スズメ目ヒヨドリ科

ほぼ1年中、鋭い大声でキツキツ。ときどき狂ったように合唱する。ビギビギキユイキユイキユイ。喉も裂けんばかり声をはりあげている。人里とその周辺なら日本中どこにでもいる。



干潟の生き物たち

行徳は、一点に立ちどの方角に向かって歩いて必ず数キロ行くと水辺にあたるはずです。それだけ海と川に囲まれた土地でありながら、水にふれて遊びが楽しめるところといつたら今では江戸川放水路のわずかにある干潟しかないようです。

先日、堤を歩いていると、水はまだ冷たいというのに元気いっぱいの男の子が泥水につかり、トビハゼをつかまえようと、はしゃいでいる姿を見ました。私も見下ろしているだけではつまらないと、仲間入りをしてみました。口ばしもスズメと違う、はだ色をして尾の形は魚のような形をしています。大きさはスズメくらいです。

私はこの鳥と初めて出会った日のことを今でもはっきり覚えています。

通勤の途中でした。電線の上で7羽が朝日を浴びて気持よさそうにさえりつっていました。そして帰宅後、野鳥図鑑をひろげてカワラヒワとわかった時の感激を。その日から朝の通勤がとても楽しくなったことを。

この楽しみは、どんなにも分けられる楽しみです。皆さんも、ちょっとだけ自然界に目・耳をかたむけてみてはいかがですか!?

他にもヒヨドリ・キジバト・オナガ・ムクドリなど身近なところでたくさん野鳥と出会うことができます。

虫も仲間

春から夏にかけての虫は、一般には迷惑な者とされている虫が多く目に止まります。

私の住いでもヤステガのそと歩いていたり、ダンゴムシが植木鉢の中でたむろしたり、アリが行列をつくって葉子くずを集めに臺の上までやってきたりします。

でもこの虫達もよく見ていると、なかなかの愛嬌者ようです。ヤステは胸長短足をなんとかおぎなおうとたくさん足をつけて足並そろえて歩く姿がとっても面白いし、ダンゴムシも2本の触角をぶりにながら歩き、我身が危いと感じるやいや、すぐに体をまるごとに変身するところが忍者頃、そしてアリの働きぶりをじっと見ていると、なんと協調性のよいことかと感心するほど。1匹のアリが大きなパンくずを巣に運ぼうと頑張っていたがどうにも動かない、それを見ていた仲間は、すぐに力をかけてあげようと数ひきの仲間をよんてきて、あつという間に運んでしまいました。

私達もアリからみならうことが色々とあるように思えてきます。

こんな可愛い虫達でもやはり家の中まで進入してこられると愛嬌者などと言つていいらず、「キャー大変よ」と悲鳴をあげてしまいます。ところが子供にとってはとても大切な仲間のようで、これらの進入者を見つけてもびくともせず、目を輝かして遊びはじめます。大人もなるべく殺すことはなく、子供と一緒に見てよく観察からにがしてあげるように心がけましょう。

*ヤケヤスター植物・枯葉などを食べる。

オカダンゴムシ
トビイロケアリー働きアリはすべてメスです。オスと女王アリは一般にはハアリといわれています。8月ころによく見られます。

自然の国から

青い木の実

戸外に出ると日陰を求めてくるこのごろ、私は夏になるとプラタナスの木陰で、なにげない時を過ごすことがあります。この日もそのはずでしたが、心ときめく一日になったのです。

それは、親しんでいた木でしたのに

プラタナスに木の実がなるなんて知らなかつたのです。ところが、なにげなく見上げた頭上の枝先に可愛いい青い実がなっていたのです。私にとっては大発見でした。さくらんぼを大きくしたような形で、青りんごのような色をしたそれは愛らしい実でした。一にぎりの、この実を手にした時、心がときめきました。遊びに夢中の娘(1才8ヶ月)のところまでとんでしまつたほどです。娘もこの実がすぐに気に入り砂遊びの仲間入りにしてしまいました。コップの中に実を置き、上に湿った砂を入れ小さな手でギュ、ギュと押して裏返し、そつとコップをとると、木の実のケーキのできあがりです。上手にできた時は手をたたいて喜んでいます。何度も何度も繰り返していました。この日から私達は戸外に出ると、葉の陰にひっそりとつけた青い木の実を見つける喜びがふえました。

*夏に見られる身近な木の実—プラタナス(スズカケソギ)、ヤブツバキ、イヌツゲ、ソメイヨシノ、ボケ、エノキ、ムクノキ、シャリンバイ、タブノキ。

一鳥の鳴き声⑤

キアシシギ(シギ科)

行徳野鳥観察舎や江戸川放水路で、小群でエサをついぱむ姿がみられる。

ピューイ、ピューイ、ピューイとすきとおつたすずしい声で鳴く。

キアシシギなど旅鳥のシギやチドリの仲間は、春と秋の渡りの途中に日本に立ちよる。



野鳥観察舎資料より

自然の国から

秋を探そう

枯葉を、さくさくと踏みながら歩く頃になると、青桐の舟のような実がくるくると舞いながら落ちるようになります。こんな秋が私は大好きです。

でも最近では、このような秋の町を感じることができなくなってしまいました。街路樹の枝は夏にむけてのびやかにのび、葉は青々と茂った失先、秋を待つこともできないまま切り落とされてしまいます。枯葉が落ちると歩く人や車に迷惑をかけると思っているからでしょうか?それとも落ち葉のそなじが大変だと思っているからでしょうか?公園の木々はどうしようと散歩に出かけると、やはり同じことのようにになってしまった木が多く目に止まりました。せめて公園だけでも秋の自然を感じとれるところであつてほしいと思います。

四季感を子供達に教えるのは言葉や図かんの上だけでなく、自然の中で十分に遊び学ぶことによって四季の移り変わりを体で感じとるようにすることが大切ではないでしょうか。少数の大人の考えだけで物事をかたづけず、これから感受性を育していく子供達のことや自然が大好きな生き物のこと、枝を切り落とす前に考えてほしいなど思つこの頃です。

*葉ち葉はくさって(バクテリアなどに分解)植物の成長に必要な物(無機塩類)になる。

*赤く(赤茶)紅葉する木→カエデ、ケヤキ、カキ、サクラ、ハゼノキ、アキニレ 黄色に変わるもの→イチョウ、プラタナス、エノキ、ニセアカシア

鳥の鳴き声 ⑥

モズ(モズ科)

キイー、キチ、キチ、キチ、キチ。秋から早春にかけて行徳でみられる。公園の樹の頂などにとまり、張りのある鋭い声で鳴く。



鳥の鳴き声 ⑦

ジョウビタキ

ヒツ、ヒツ、ヒツ、カツ、カツ、カツ。冬鳥としてシベリアオレンジ色地方から渡ってくる。行徳の市街地でもよくみられる。スズメくらいで胸から腹がオレンジ色。



星に祈りを

常日ごろ、澄みきった冬の夜空の美しさを娘に見せてあげようと思っていたので、出先からの帰りが夜の十時ごろとなってしまった日のこと、これ幸いと帰り道を遠回りし、空の大きく見える空地を選んで帰ることにしました。空地から見上げた夜空には星が美しく輝いていました。

それでも秋が深まる11月に入ると、澄みきった青い空に細い絹糸をひいたような、すじ雲(巻雲は日没のころになると黄色や赤色に輝いてみえます)が美しく映える日が続きます。そんな日は、夕方になると必ずといってよいほど夕焼け空が見られ、真っ赤な太陽が家々の屋根まで赤く染めて沈んでいきます。私は美しい空を見上げているうちに、いつの間にか娘と手をつなぎ、「夕やけこやけで日がくれて……」と大きな声で人目も気にせず歌をうたっているのです。

自然の美しさは本当に人の心を和ませてくれるものですね。そして野鳥達も美しさがわかるとみて、早くねぐらに帰らなくてはならないムクドリも数十から数百の群になって電線に止まり、太陽にむかって一日のお別れをおしまるようにしてしたり、カモの群やサギの群が、夕日にそまって飛んでいる姿などが見られたりします。夕ぐれの空を見上げてみませんか?

*秋に見られる雲/巻雲(すじぐも)→白いすじ状の雲。高さ地上5km~13km 卷積雲(うろこぐも)→白いうろこ状の雲。高さ地上5km~13km 卷層雲(うすくも)→白いペールのような雲。高さ地上5km~13km

鳥の鳴き声 ⑧

ゴイサギ(サギ科)

グゥ、グゥ、グゥ、グゥ、グゥ、グゥ、空を見上げていると、月や星の光をよぶ美しい影が、アーッと鳴いてフワフワと飛んでいます。ゴイサギ(サギ科)は日本カラス科に属します。白サギと連なる個性です。面積約400羽くらい見られます。(繁殖している)鰐黑色幼鳥 成鳥 青灰色



行事案内

誰でも自由に参加できます。参加費無料。



☆定例新浜観察会(毎月第2日曜日) 8月9日、9月13日

集合: 東西線行徳駅前 午前10時

解散: 行徳野鳥観察舎 午後3時頃

担当: 東 良一

持物: 昼食、飲み物、バス代(大人210円、子供110円)、帽子

妙典では、急ピッチで埋め立てが進んでいます。毎夏、美しい花を咲かせて私達の目を楽しませてくれたハス田も、次々と土砂の下に埋まっています。江戸川土手でシギやチドリを眺めながら昼食をとり、午後からバスで保護区へ向かいます。小雨決行



☆定例園内観察会(毎月第1・3日曜日) 8月2日・16日、9月6日・20日

集合: 行徳野鳥観察舎前 8月: 午後3時 9月: 午後1時半

解散: " 8月: 午後5時 9月: 午後3時半

担当: 観察舎 蓮尾、協賛 友の会



保護区の本土内では湿地造成工事が始まっています。新池に秋の渡りのシギ・チドリがやってくるとよいですね。夏場は集合時間がいつもと違うので御注意下さい。暑いので帽子をお忘れなく。雨天中止



☆夕涼み観察会(第4日曜日) 8月23日(日)、9月27日(日)

集合: 行徳野鳥観察舎 午後5時

解散: " 午後7時頃

暑かった1日の夕暮れ時、のんびり保護区の中を歩いてみませんか。9月になれば虫のコラスも楽しめます。虫さされ予防のため、長袖・長ズボンで。防虫スプレーも便利です。雨天中止



☆丸浜バードリバーを調べよう(毎月第4日曜日) 8月23日、9月27日

集合: 行徳野鳥観察舎 午前10時

解散: " 午後3時頃

担当: 東 良一 [REDACTED] 矢野耕一

持物: 長ぐつ、タオル、ビニール手袋、昼食

6月の調査では、各水車の下で10匹以上のイドミミズやユスリカが採取されました。3台の水車が川を少しづつ生き返らせていました。夏休みの自由研究をかねて、一度参加してみませんか。小雨決行



☆水鳥カウント

9月15日(火・祝)

申込: 東 [REDACTED] 蓮尾 [REDACTED]

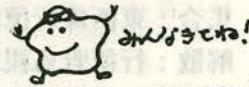
保護区、妙典、塩浜海岸などで水鳥のカウントをします。むずかしいことはありません。どなたでも大歓迎ですので、ぜひ御参加下さい。小雨決行

☆☆☆ 夏休み特別行事 ☆☆☆

ジャー！夏休み行事のご紹介。友の会では今年もいろいろな行事を予定しています。会員でなくても参加は自由ですので、お友だちもどんどん誘ってきてね。

☆クリーン・丸浜川

7月25日(土)



集合・解散：野鳥観察舎

詳しくは別刷のチラシを見て下さい。第2部のバーベキューは会費制・予約制です。
必ずお電話でお申込下さい。雨天中止

☆こども自然観察会

8月8日(土)

集合：野鳥観察舎 午後3時

解散： リ 午後5時頃

担当：東 馨子 [REDACTED]



観察舎から特集したゴイサギを観察します。幼鳥と成鳥の違い、エサ場での行動などを観察してみましょう。観察舎から見られる他の鳥の説明なども聞けます。

☆マスコット作り

8月15日(土) 形づくり

22日(土) 着色、仕上げ

場所：野鳥観察舎 午後1時半～3時半

担当：蓮尾純子 [REDACTED]、東 馨子 [REDACTED]



持物：15日；竹ぐし、広告やカレンダーなど裏のツルツルした紙

水入れ（プリンカップのようなもの）、材料費 100円

22日；水彩絵の具セット

石粘土でかわいい鳥のマスコットを作ります。とても簡単なので、小さなお子さんでもだいじょうぶ。親子でチャレンジしてみましょう。

編集後記

フォー・オクロック、オシロイバナの英名です。午後4時ごろから開花し、午前4時ごろにはしほみます。花はパラシュート、黒い実の中の白い粉は鼻の頭につけるおしろい、楽しくてきれいな花です。今年もどっさり咲きました。いつもこの花の前であなたとしゃべりしたものですね、文子さん。（純）

湿地造成工事、夏休み行事と予定がいっぱいです、この夏は夏休みどころではなさそうです。水鳥誘致実験を成功させ、昔の新浜の姿を少しでも取り戻すことが文子さん的一番の供養になると思っています。（馨）

すずがも通信 No. 45

1987年8月1日発行

発行所 行徳野鳥観察舎友の会

年会費 一般1000円、ジュニア500円

発行人 東 良一

郵便振替 [REDACTED]

事務局 [REDACTED]

編集 蓮尾純子、東 馨子

行徳野鳥観察舎 [REDACTED]